

長期留学・海外インターンシップチャレンジ奨学金 報告書

2026 年 8 月 22 日

国際経営学部国際経営学科 3 年

前田美結

1. はじめに

私は、2025 年 9 月から 2026 年 6 月の 10 ヶ月間、スイスのジュネーブ大学で交換留学生として学ぶ機会をいただきました。本奨学金の受給にあたり、国際経営学部事務室の方々をはじめ、お力添えをいただいたすべての方に感謝いたします。

本報告書では、留学先での活動を学習面と生活面に分け、それらの経験から得た学びを詳述します。

2. 学習面

大学での学習にとどまらず、フランス語の習得や学外での実践的な学びまで、幅広く挑戦しました。国際都市ジュネーブという地域性を最大限に生かし、国際機関との接点を持つ講義や国連機関への訪問に参加するとともに、現地学生と切磋琢磨しながら主体的な学習姿勢を養いました。以下に大学での取り組みや、ジュネーブならではの学びについて記述します。

2. 1 ジュネーブ大学について

ジュネーブ大学（Université de Genève）は、1559 年にジャン・カルヴァンが創立したスイスで 2 番目に大きな規模を誇る歴史ある大学で、国際機関などが集まるスイスの都市ジュネーブに位置します。街中にキャンパスがいくつか点在しており、私が所属した学部（Économie et management）が入るキャンパスは Uni Mail という名称で、他学部の学生も多く通うメインキャンパスでした。正規留学生や交換留学生が多く、様々な国から学生が集まっており、大半の学生は公用語であるフランス語に加えて英語も堪能であるため、まさに国際都市ジュネーブを体現する国際性に富んだ環境でした。

図書館などの学習施設も充実しており、テスト期間に限らず学期中は自学に励む学生でいつも賑わっていました。この環境に私自身も感化され、授業後に図書館に寄って勉強するように心がけて過ごしました。スポーツ活動も盛んで、日本の大学のような部活はありませんが、サークルのような形式で様々なスポーツをする機会が設けられていました。

私はバドミントンの試合に参加し、そこでも新たな交友関係を築くことができ良い機会になったと思います。

2. 2 授業について

授業については、所属する *Économie et management* で、マーケティングや金融、HRM、マクロ経済など、国際経営学部で学習した内容の延長となるような経営・経済系の授業を主に履修しました。またジュネーブにちなんだ学習をしようと思い、他学部履修で *International Geneva* という、ジュネーブと国連機関の関係性や歴史、国連機関の意義についての講義も履修し、学びを深めました。

ジュネーブ大学での授業で一貫して印象的だった点は、ゲストスピーカーの講義が多いことです。経営者や国連職員、企業のマーケティング部門の方などのお話を授業で聞くことができ、非常に有意義でした。また、*International Geneva* の授業では、実際に国際連合ジュネーブ事務局を訪問する機会があり、施設内の見学や職員の話等を伺い、ジュネーブと国連の歴史や国連の存在意義など、変化の著しい現代社会で、国連がどう機能すべきなのかを考える貴重な学習機会を得ることができました。このような国際関係に付随する内容を学習することは日本では少なかったため、得られる知識が新鮮であったとともに、実際に足を運ぶことで、これまでテレビやニュースでしか見ることのない遠い存在だと思っていた国連を現実的なものとして捉えることができました。複数の国連機関が集まる国際都市というジュネーブの地域性を活かした実践的な学びができたと思います。

言語面では、留学生向けのフランス語講座が開講されていたため、秋学期は週2回、春学期は週1回クラスを受講し、フランス語の習得に努めました。私はフランス語初学者だったため、秋学期は一番初級のコース（Pre A1）を受講し、春学期は少しレベルを上げて A1&A2 のコースを受講しました。受講生のほとんどが交換留学生で、日本や韓国、中国などのアジア出身者から、チェコやフィンランド、アメリカなど欧米の学生まで多様なメンバーで構成されており、同じフランス語の単語や文章でも、母語が違えば発音の雰囲気が変わり、その違いが面白いと感じたことが印象に残っています。私もフランス語の発音やアクセントに初めは苦戦しましたが、授業を重ねるごとに徐々に習得することができました。授業の内容としては、フランス語での自己紹介やレストランでの注文などの日常会話を学ぶ授業と、文法や語彙などフランス語のルールを学ぶ授業の2種類を受講し、基礎から応用までを体系的に学びました。授業で学んだ内容を日常生活でも実践し、友人や店員さんと意思疎通が図れたときはとても嬉しかったです。

留学中に学業面で苦戦したことは、履修した科目の大半の成績が期末試験 100%の一

発勝負で決まる点です。試験前のプレッシャーが非常に高く、勉強に苦戦する場面もありましたが、現地学生と一緒に勉強したり互いに教え合ったりすることで、自分なりに全力を尽くすことができたと思います。しかし、学期分すべての試験範囲をこなす経験があまりなかったため、中間試験やレポートなどがある日本での大学生活との違いに戸惑うこともあり、いくつか反省点もありますが、それも含めて多くの教訓を得ることができ、タイムマネジメント力や周囲との協力の大切さを学ぶ機会になりました。



Uni Mail



パレ・デ・ナシオン（Palais des Nations）

2. 3 ITU 訪問

現地で出会った人とのネットワークがきっかけで、ITU（国際電気通信連合）訪問に参加しました。ITU とは、電気通信に関する国際標準の策定や電波の周波数・衛星軌道の割り当てを行う、国際連合の専門機関です。訪問では、情報通信ネットワークに係る日本国内の標準化機関である TTC という機関と合同のワークショップが行われ、標準化政策に関する議論と発表をグループで行いました。電気通信という分野に関しては、これまであまり馴染みがなかったため、最初は議論を進める難しさを感じました。しかし、参加者と協力しながらワークショップに挑むことで、グループワークで発言する緊張感を味わうとともに、専門知識を多く学ぶことができ、自己成長の場になったと思います。また施設見学では、ITU の建物内に加盟国である日本の国旗が掲げられているのを目にし、それまでどこか遠い存在のように感じていた国連機関を急に身近なものとして実感しました。国際機関が果たす役割の大きさを、実際に肌で感じる貴重な経験となりました。

3. 生活面

留学中の生活面については、学内外のコミュニティへ積極的に飛び込み、多様な人々との関わりを深めることを意識しました。具体的には、多国籍な環境での寮生活や学生支援ボランティアへの参加、現地学生との言語交流（タンデム）という活動に取り組むことで、語学力の向上に加え、異文化への適応力や主体的なコミュニケーション能力を養うことができました。以下にそれぞれの活動内容と得られた学びについて記述します。

3. 1 寮生活

私が生活した寮（cité universitaire de genève）は、大学からバスで 20 分ほどの場所にある学生寮です。部屋は個室ですが、キッチンやお風呂、トイレはフロアで共有でした。同じフロアには出身地や年齢、性別が異なる 15 名が住んでおり、多国籍のフラットメイトとの生活は、食文化や生活習慣の違いを肌で感じる良い経験となりました。日常生活の大半は英語を使って過ごしていましたが、フランス語のみを話すフロアメイトとはフランス語を教えてもらいながら会話をするなど、日常生活を通して言語面の交流も盛んに行うことができました。寮全体のイベントも定期的で開催され、フロアメイト以外にも様々な人との関わりを深める良い機会でした。試験前には友人と一緒に共有スペースで勉強するなど、学業面でも切磋琢磨し合える関係を寮生活で築くことができ、交友関係を深められたと思います。



部屋からの眺め



友人達と寮でチーズフォンデュ

3. 2 ボランティア活動

留学中は、学生向けの食料配布を行う団体でのボランティア活動にも参加しました。参加したのは「La Farce」という、主にジュネーブ大学の学生によって運営される食料を無料で学生に配布する取組を行う団体です。ボランティアに参加しようと思った理由は、

これまであまり経験のなかったボランティアに挑戦したいという思いと、フードロスの削減および学生支援を通じた社会的な連携を育むという、La Farce の活動目的に強く感銘を受けたためです。留学先での生活をさらに充実させるべくボランティア活動への参加を決意しました。

具体的な活動としては、週に一度の食料配布やその準備を行いました。スーパーなどから引き取った食材を陳列し、訪れる学生に実際に配布するなど、準備段階から携わることができ、活動を支えるスタッフ側としてのやりがいを実感しました。配布中は、英語のみならずフランス語を使う場面も多々あり、活動を始めたばかりの頃は、フランス語の聞き取りや会話に戸惑いがありました。しかし、活動を重ねていくうちに、フランス語にも慣れていき、完璧に理解することができない場面でも状況の文脈から内容を把握するなど、活動中の様々な状況に柔軟に対応する力を養うことができたと感じています。さらに、ボランティア学生同士のパーティーやイベントなどにも積極的に参加し、大学や寮生活以外のコミュニティを築くことができました。学生による学生向けの食料配布サービスは、これまで日本では馴染みがなかったため、非常に新鮮な経験であったと共に、このような支援形式が日本でも行われたら良いと感じました。そして、この支援が物価の高いジュネーブで暮らす学生にとって大きな助けになっているということをこの活動を通して実感しました。

このように、これまでボランティア経験の少なかった私にとって、La Farce での食料配布支援のボランティア活動は、日本では経験し得なかった体験であり、ボランティアの意義ややりがいを実感する貴重な機会となりました。



食料配布の様子

3. 3 言語交流（タンデム）

ジュネーブ大学にはタンデム（母語が異なる2人がペアになり、お互いに学びたい言語を教え合う）という言語交流の場が設けられていました。私は実践的なフランス語習得を目指し、日本語を学ぶ現地学生とペアを組み、日常会話を中心に互いの母語を教え合いました。

私はフランス語初学者だったため、フランス語の独特な発音などに苦戦しましたが、タンデムの相手に丁寧に教えてもらうことで、ネイティブの生の発音を聞きながら学べる良い機会となりました。また、大学のフランス語の講義で学んだ表現や語彙を実際の会話で積極的に試すことで、タンデムを、習得した内容をアウトプットする場として有効に活用しました。一方で、フランス語を教えてもらうと同時に日本語を相手に教える過程では、自分の母語を客観的に捉え直す機会となり、言語の面白さや教えることの難しさを実感しました。具体的には、日本語特有の敬語の表現やニュアンスの違いを言語化して伝えることです。これまで感覚的に使っていた日本語を外国の人にどう上手く教えるかというのは個人的な課題であり、相手の習熟度に合わせて単語を噛み砕いたり、日常の具体的な場面に置き換えて説明したりするなどの工夫を重ねました。

このタンデムの経験は、ネイティブからフランス語を学ぶことができる貴重な学習機会になっただけでなく、日本語ならではの趣や魅力を再確認するきっかけにもなり、言語学習の楽しさを改めて実感することができました。

4. おわりに

この留学は、私にとってかけがえのない経験となりました。学業面・生活面の両においてこれまでにない挑戦と成長の機会に満ちた、非常に密度の濃い期間となりました。留学生活は楽しいことが沢山あった反面、トラブルや困難に見舞われることも多々ありましたが、現地で出会った人々の協力もあり乗り越えることができ、これらの経験は自身の精神的な強さや問題解決能力を育むことにもつながったと感じています。

最後に、大学関係者をはじめ、渡航前から現地での生活に至るまで支えてくださったすべての方々に深く御礼申し上げます。留学で得た経験を、今後の学生生活やキャリアに活かし、社会に貢献できるよう努力して参ります。